

住宅のあり方から考えるエコビレッジという選択

取材・文 岡崎工二



第一分譲エリア（107区画） 第二分譲エリア（165区画）



小舟木エコ村
 NPO活動から生まれた民間事業によるエコビレッジ。集会所や広場を中心に、農を核としたコミュニティづくりの仕組みを取り入れている。住宅は、パッシブソーラーや高性能の建築家とつくる本造住宅のほか、ミサワホームやパナホームなどハウスメーカーの条件付分譲地も選択できる。右/分譲地の中心に位置する集会所。薪ストーブもあり住民たちの交流の場として活躍する。上・中/地球の芽によるパッシブデザインを取り入れた住宅。食べられる実を付ける樹木も。下/全部で372区画を販売する予定。現在第二期分譲販売中。http://www.kobunaki-ecovillage.com/ 写真提供/地球の芽

「小舟木エコ村」と神奈川県藤野市にある。去る4月24日から3日間、東京・海浜にて「第3回エコビレッジ国際会議（OKYO）」が開催された。エコビレッジとは、地球生態系の一員として他の生き物とともに、未来に地球に暮らし続けたいと思う人たちが集まったコミュニティと、情報しあいでいいだろう。つまり、環境はもちろんだが、人と人のあり方、エネルギー問題、経済格差、貧困など、現代社会が抱えるさまざまな問題に取り組み、暮らしを通してそれを実践する場だ。

第3回目を迎えるこの会議だが、おとし聞かれた2回目とは随分変わった。今までエコビレッジというと、昔野を切り開いてあるひとつの思想や信念を核に人々が集まったコミュニティ的なコミュニティといったイメージが強かったが、「ああ、これもエコビレッジなんだ、ならば私も」と思えるような、多様かつ日本らしいコミュニティのあり方が紹介されていたのが印象的だった。その中でも住宅のあり方を考えるのに面白い事例をいくつか紹介したい。

一方「里山農屋」のほうは、住むのは4世帯だけという小さなエコビレッジである。長屋のように連なる4世帯にみんなが使える共有スペース、キッチンやゲストルームを完備。北欧で多くみられるコハウジングと呼ばれるもので、食事を共にすること

にある「里山農屋暮らし藤野プロジェクト」だ。「小舟木」は、パブル期に工場跡が活用されてしまったものの未利用だった土地に、最終的に372世帯の住宅を建てる土地を区画した分譲地型エコビレッジだ。一畝ふつうのニュータウンのような感じだが、ポイントが各戸に10坪ほどの菜園と雨水タンクが設けられていること。10坪は4人家族が食べる野菜の半分を供給できる広さだ。さらに、野菜づくりをコミュニティケーションツールとして、近所づきあいや食の安全、持続可能なライフスタイルへの意識共有が図られる。面白いのは、その土地に建てる家は、セキスイハイムなどハウスメーカーから選択できるという。エコへの関心の度合いや嗜好の違いも引き受ける開口の広さが魅力のひとつでもある。

「世界だけでなく成立するものではない。そのとき、どのようにコミュニティを築いていけるかが鍵となる。家をデザインすることは、周囲の人や環境とどう生きるかをデザインすること。」ホリスティック（総合的）に「エコビレッジ国際会議」で多く聞かれたこの言葉は、住まいのあり方を見つめなおすキーワードになりそうだ。

でコミュニティを築めることができる。共有スペースでは、里山暮らしを体験するための勉強会やさまざまなイベントも開催。それらは、地域の人たに開かれており、いわば、4世帯から周囲にじんわりエコビレッジ的暮らしが広がっていくという仕掛け。また未着工物件ながら、「壁のための竹小舞づくり」など、すでにエコな家づくりのためのワークショップも多数開催されており、その輪は着実に広がっている。

環境に配慮した住宅が叫ばれて久しいが、エコな暮らしというのは、一世帯だけで成立するものではない。そのとき、どのようにコミュニティを築いていけるかが鍵となる。家をデザインすることは、周囲の人や環境とどう生きるかをデザインすること。」ホリスティック（総合的）に「エコビレッジ国際会議」で多く聞かれたこの言葉は、住まいのあり方を見つめなおすキーワードになりそうだ。



里山農屋暮らし藤野プロジェクト
 地元の木を使い、高断熱や太陽熱利用、雨水タンク、薪ストーブなどを導入した省エネルギー住宅。4世帯で家づくりの情報を共有し、それらをブログで公開することで、なかなか体験できない家づくりを共感する人々とシェアしている。例えば、煙灰用の灰をつくったり、山菜摘みワークショップを行ったり、奥わかれつある里山ならではの暮らしを学ぶ場になっている。上右/完成予想図。4軒農屋にコミュニティ棟が建つ。背後は里山で南面には畑。上左/里山の山野草を採集するワークショップ。積み取った野草を料理して食べる。下/竹炭づくりのワークショップ。http://blog.carpan.info/nagaya2 写真提供/里山農屋暮らし藤野プロジェクト

おかげさまで、えみー1973年開校以来、本校は、早大卒業生、学研「ラ・ナー」又「LIVING DESIGN」編集長を経て、2010年に新築した「ソーシャルデザインセンター」に活動の拠り所。